佐藤佐太郎の短歌の世界

今西

今西幹一著

佐藤佐太郎の短歌の世界

桜楓社

今西幹一（いまにし・かんいち）

1936年　大阪市南区生まれ。本籍地(三重県・飯高町)と二地で、成育。
1960年　関西学院大学文学部日本文学科卒業。
1965年　大阪府立高校教員の傍ら、関西学院大学大学院文学研究科日本文学専攻入学。
1970年　修士課程を経て、同大学院博士課程を単位修了。
1976年　山梨英和短期大学助教授。現在教授。

専　　攻　近代詩歌（特に近代写生主義短歌の研究）。

著書・論文　『(短歌シリーズ・人と作品）佐藤佐太郎』（桜楓社　長沢一作氏と共著）
「アララギの最初期の歌人岡千里について」『(和歌文学の世界８）アララギと明星』（笠間書院）
他に正岡子規、伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉、与謝野鉄幹、石川啄木、立原道造等に関する論文がある。

現住所　〒407　山梨県韮崎市旭町上条北割1837—15

佐藤佐太郎の短歌の世界　　定価 4,800円

昭和60年10月10日　初版　印刷
昭和60年10月20日　初版　発行

著　者　今西幹一
発行者　及川篤二
印　刷　共信社

発行所　株式会社　桜楓社
東京都千代田区猿楽町２—８—13
(郵便番号)101(振替)東京6-18020
(電話番号)　東京 03-295-8771

© K. I. 1985 Printed in Japan 著者検印は省略いたしました。
造本には十分注意しておりますが落丁乱丁の場合はおとりかえいたします。
ISBN4-273-02049-1

佐藤佐太郎の短歌の世界　目次

序　章　佐藤佐太郎短歌の心……7
第一章　歌人佐藤佐太郎の誕生……13
一　アララギの新進として　15
二　昭和期短歌の「新風」として　31
第二章　佐藤佐太郎短歌の展観——成立と展開——……45
第三章　佐藤佐太郎短歌の世界……71
第一節　佐藤佐太郎短歌の成立……73
一　『軽風』の世界——佐藤佐太郎調の形成——　73
二　『歩道』の世界——佐藤佐太郎短歌の成立——　95
第二節　佐藤佐太郎短歌の蕩揺期……129
一　『しろたへ』の世界——静謐幽微の境地への憧憬——　129
二　『立房』の世界——生活譜的形成と業余の旅——　160
第三節　佐藤佐太郎短歌の確立……190
『帰潮』の世界——純粋への回帰——　190

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四節　佐藤佐太郎短歌の発展……219
『地表』の世界――「行旅自然」詠・自然との対立と調和の中で――　219
第五節　佐藤佐太郎短歌の展開……245
一　佐藤佐太郎短歌の第一の転機
『群丘』の世界――原郷への回帰と、「郷愁」の始まりとしての「行旅自然」詠――　245
二　佐藤佐太郎短歌の成熟
『冬木』の世界――羈旅写生詠の極致――　266
三　佐藤佐太郎短歌の第二の転機
『形影』の世界　①『形影』の本質――影、形に添う――　288
②「五紀巡游」論――立ち還る生（いのち）――　306
四　佐藤佐太郎短歌の円熟
『開冬』の世界――「老い」の地平――　324
第六節　佐藤佐太郎短歌の到達――老いの生の味到――……353
一　『天眼』の世界――「蛇崩坂」詠の位相――　353
二　『星宿』の世界――老いの生の「あはれ」――　380
終　章　近代短歌史における佐藤佐太郎の位置……395

余　章……425
一　佐藤佐太郎を短歌に誘った茂吉の一首について　427
二　「岩波五十年史」における佐藤佐太郎　429
三　『新風十人』「黄炎抄」と歌集『歩道』　432
四　佐藤佐太郎研究・評価史の展望　435
五　佐藤佐太郎短歌における比喩表現――「写生」主義短歌の手法としての――　457
六　「スフィンクスの如き……」の歌をめぐって――『帰潮』入集歌・非入集歌――　476
七　角川文庫版『佐藤佐太郎歌集』のこと　486
あとがき　495
本書所収稿・初出一覧　499
付　佐藤佐太郎略年譜　503

佐藤佐太郎の短歌の世界

序　章　佐藤佐太郎短歌の心

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

現在活躍する幾多の歌人の中で、誰々を短歌界を代表する歌人と見なすべきか。三指とするか五指とするか、それによって違うし、そのいずれを数えるにしても至難な課題である。その一つの尺度として桜楓社から刊行されている「短歌シリーズ・人と作品」（二十四巻）に単独で取り上げられている歌人を見てみる。そこに取り上げられている明治・大正・昭和の歌人二十人中、現存する歌人は土屋文明、佐藤佐太郎、宮柊二、近藤芳美の四人である。企画段階で浮上した名前も幾人かあったらしいが、現存歌人でこの四人が最終的に他の十六人の物故の近代歌人とともに独立した巻を占めたのは穏当な結果と考えられる。そして、伊藤左千夫門下として明治期からの作歌歴を有する土屋文明は別格として、佐藤佐太郎、宮柊二、近藤芳美の三人を声名とともに力量を兼ね備えたところの、現短歌界に鼎立する重鎮と目していいと思われる。

わけても、佐藤佐太郎は、昭和二年、十七歳にして斎藤茂吉の門に入り、七十余歳の今日に至るまで、アララギ写生主義の正道を歩みつづけて来た。処女歌集『歩道』（昭15）以来、最近の第十二歌集『星宿』（昭57）に至るまで、業において他を凌ぎ、その間読売文学賞、芸術選賞文部大臣賞、現代短歌大賞、芸術院賞、釈迢空賞、紫綬褒賞等顕彰されること頻りで、更には近時芸術院会員に列せられている。まこと、現短歌界の第一人者の観すらあるのである。

今日の佐藤佐太郎評価は、その写生に徹し、それを極致にまで推し進めた作歌姿勢にかかわっている。師である茂吉譲りの対象の核心の直截な掌握力と、親炙した長塚節ばりの繊細微妙な感受性に加えて、緻密で統一と連関ある有機的な構成力が佐太郎には具備されている。

秋分の日の電車にて床（ゆか）にさす光もともに運ばれてゆく　（『帰潮』昭25 Ⅶ）

篁（たかむら）の内部が見えて竹の幹すこやかにひとつひとつ立ちゐる　（『地表』「Ⅸ春夜」昭29）

冬の日の眼に満つる海あるときは一つの波に海はかくるる　（『開冬』「寒渚」昭45）

ほとんど任意な抄出であるが、佐太郎の対象を見る確かな目と、存在の内奥に迫真する写生の手法を窺うことができる。そして把えられた存在の窮極的な態様は時として思いがけない温みや清冽さ、更には凄絶なまでの寂寥の相を見せてくれるのである。こうした歌を見てもわかるように、写生の方法家としての佐藤佐太郎をいくら称賛しても決して過褒ではないのである。しかし、方法家としてのこの歌人を推挽しつづけて来た従来の佐藤佐太郎論が看過して来た観点がある。それは、佐太郎短歌の心の問題である。

結論から先に言うと、佐藤佐太郎は近代的な憂悶の情を心に抱きつづけて来た人である。絶対的な孤独者として、常に底深い孤独を相伴する人である。茨城の田舎から上京し、十代にして岩波書店員であった日々、佐太郎は神経衰弱に悩まされ、郷里との間を往還することしばしばであった。やり場のない心を抱いては浅草に出て酒や酒場女や大衆演芸に遣情を求める孤独な退廃者だったこともある。こうしたことは、今日の佐太郎年譜からは抹消されていて知る人の少ないところである。個を抑圧し磨耗してやまぬ近代社会の機構は、更に個人の本質的な価値よりも、学歴や門地門閥、有力な庇護者、処世術といった付帯的な価値をむしろ要求する。徒手空拳の地方出の少年を、都会と近代とが傷めつけ、苛み、蝕んだものは底深いものがある。少年は作歌を知ってようやく精神の均衡を得、心を解き放ち、作歌は次第に業余の業、趣味、余技の域を超え、生を確かめ、生を証するすべとなるのである。佐太郎の大方の歌が自然的外在の形象にあるが、その基調は生の深淵に測鉛を下ろし、深く生の意味を掬し、心の奥秘を探索するところから発する嗟嘆の声にあるのである。

こころより悔が湧くときありて昼のあいだも泪いでむとす　（『歩道』「軽風」　昭9）

次第なくこころは悲しながらふる夜の寒に帰り来るとき　（同「きさらぎ」　昭12）

苦しみて生きつつをれば枇杷の花終りて冬の後半となる　（『帰潮』　昭22　I）

工事のため亡びし庭を濡らす雨貧去りて苦の続くわが生ぞ　（『地表』「II新屋」　昭29）

わが膝を毛布につつみ坐り居り伴ふもののなき孤独にて　（同）

憂なくわが日々はあれ紅梅の花すぎてよりふたたび冬木　（『冬木』「I冬木」　昭40）

よろこびに憂ひに心さわがざれ夏草むらのにほふ午後　（『形影』「浜木綿」　昭43）

何もせず居ればときのまみづからの影のごとくに寂しさきざす　（同「形影」　昭44）

若い日の清冽な感傷に溢れた悔恨の情から、老境の底深い孤独から湧き出る寂寥感に至るまで、次第なき悲しみも、苦しみも、憂いも、実存的な憂悶と絶対的な孤独を常に生の基底に置くところに出来する。佐太郎のこうした憂苦は、師茂吉のように病院の火災による院長として経営上の腐心、夫人のスキャンダラスな行状や自らの女弟子への係恋など、実務上、処世上もたらされたものではないのである。

「うちさましうちさましして」たもちたる不犯を斑髪のわれが尊む　（『冬木』「斑髪」　昭40）

蘇東坡曰不聞不見我何窮

聞かず見ずありて安けく過ぎなんを病み伏すときに窮るらしも　（『開冬』「臥床」　昭48）

佐太郎は生の規範を求め、自らを律すること厳しい人である。佐太郎の心は、深切な内省、観照に晒されて、悔悟と憂苦をより深刻に、より闡明にして行き、寂寥を加味して行くのである。こうして佐太郎短歌は、年とともに倫理的色相を深め、濃くして行くのである。現代の歌人の中で、倫理的であるところに佐太郎の特異性があるであろう。

佐藤佐太郎が路傍にあっても、旅に出ても、与えられた自然の瞩目の対象を、写生の方法に徹してゆるぎない形象に努めるのも、客体を見極め尽くすなかに作者たる主体の生の充足充実を得ているからである。客体の明確化は主体の確立につながる近代的な認識論のなかに佐太郎はいるのである。自然は佐太郎の憂悶、孤独のただ単なる慰藉、遣情の対象となるだけでなく、憂悶、孤独そのものを鮮しくする生の代謝をなす場ででもある。ここに写生は

方法の域を超えて、抒情の本質となるのである。

第一章　歌人佐藤佐太郎の誕生

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com